

あなたの農場に、妊娠牛は何頭いますか？

「いま、乳量は何 kg ですか？」 — これは、わたしたちが問いかけたときに比較的すぐに答えが出る、つまり、農場でその値が把握されている質問です。泌乳は繁殖サイクルの一部であり、分娩 → 授精 → 妊娠 → 乾乳 → 分娩 … の中で酪農家は乳量を得ることができます。経産牛では、現在搾乳している牛たちが確実に妊娠しなければ、牛を買ってこない限り今後の収入源（乳量）の見込みを立てることはできません。妊娠牛頭数は、今後の経営状態を表すサインのひとつにもなります。では、次の質問はどうでしょうか。

「現在、農場に妊娠牛は何頭いますか？」

この質問に明確な答えが返ってくるケースは、実はさほど多くはありません。妊娠牛が事故なく分娩を迎えることなど、気をつけるべきポイントはそれぞれにあるのですが、それにしても、妊娠牛がいなければ、話は先に進まないのです。

では、どのように妊娠牛を確保していけばいいのでしょうか。

妊娠牛の頭数を知り、継続的に記録する

台帳／カレンダー／繁殖管理ソフト／乳検データ／繁殖検診データなど、農場で活用しているツールから、現在の妊娠牛（含・乾乳牛）が何頭いるかを数えることから始めます。牛群構成によりますが、最低でも経産牛群の半分頭数が妊娠していることを目指します（例えば経産牛 60 頭規模では、妊娠牛＋乾乳牛が 30 頭以上いるかどうか）。半分数に届いていればそれを維持できるように、または現状より高い頭数に目標を設定します。

はっきりとした目標を立て、農場内で共有することで、取組む側にとっての意識付けがしやすくなります。また、継続的に記録をつけることを忘れないようにします。

VWP（自発的待機日数）の設定と発情発見、そして授精

初回授精を分娩後〇日目から始めるかを決めます。この「〇日」がVWPとなります。デーリィジャパン誌 2006 年 2 月号で THMS の黒崎獣医師は「VWPとは『その終了後、最初の周期である 24～25 日以内に対象となるすべての牛の発情を発見し、種付けをします』という意思表示」としています。VWP 50 日と設定した場合、農場の泌乳牛が分娩後 50 日を過ぎたら、75 日目までの間に必ず 1 回授精をしなければならない、ということになります。一般的にVWPは 40～80 日程度で設定されることが多いようです。

最近の傾向として、高乳量化／多頭化によってか、この時期の発情は残念なことに「来てくれる（発情徴候がよく見える!）」のではなく「つい見逃してしまう」ことが多く、「見つける意思」が強くなっては「見つけづらい」ものになってきているようです。

授精後の再発情を見つける

藤井牧場の睦子さんは、技術のページ 08 年 10 月「[＜特別寄稿＞繁殖についての取り組み～牧場と、若き酪農ミセスの奮闘記](#) <http://www.kk-tanbaya.co.jp/cgi-local/chikusan/topics.cgi?no=23#column>」で、獣医師から「妊娠鑑定時にマイナスの牛が多いということは、受胎率が低いからだけではなく、発情の再発が見つけられていないことも原因である」と指摘されたことを書いてくださいました。「再発を見つけて授精していれば、その牛は妊鑑のリストには上がってこないし、プラスの牛の割合が高くなる、ということなのです」。一度授精をした牛は、妊鑑を行うまで油断しがちですが、授精後の周期で、再発情がきていないかをしっかり観察することも大切です。

早期の妊娠鑑定と、次の一手

初回授精後 2 回目の授精までの間隔が大きく開いているときは、何らかの理由で発情を見落としていることが考えられます。一般的に、2 回目の授精時期は、その産乳量などから発情が見つけづらく、初回授精で受胎できたのかどうかを見極めにくい時期でもあります。そのため、いかに早く「授精後の未受胎牛」を把握できるかが次のポイントになります。

最近では直腸検査（直検）による触診に加え、エコーを活用した妊鑑を行う地域が増えていきます。条件は地域ごとに様々ですのでここでは手段は問いませんが、直検による触診のみで授精後 40 日程度の妊鑑を行っている地域も少なくありませんし、触診＋エコーであれば、30 日程度で胚の状態を視覚的に確認しながら精度の高い妊鑑と処置が可能です。未受胎の把握が早ければ早いほど、再授精やホルモン治療など、次の一手を打つチャンスも当然早くなります。どれだけ早く、確実に妊鑑できるかが非常に重要だと考えます。

早期妊鑑の後には、再妊鑑を

早期妊鑑でプラス（受胎）と診断された牛は、適切なタイミングで再妊鑑を行い、確実に妊娠していると思われる状態で乾乳期を迎えることが大切です。胚（胎児）の死滅や流産のケースもありますし、時には妊鑑ミスもないとは言えません。「妊娠牛だと思って乾乳にしたが、空胎牛だった」ということのないよう、念には念を入れてチェックします。

繁殖サイクルを良くすることには時間も気合も手間もかかりますが、エサなど栄養面の改善と併せて取り組むと、長期的に安定して乳生産量の増加が見込めます。乳牛の場合、搾乳日数平均が短くなる、など、牛群構成がよくなることで飼料効率が高まり、エサ代に応じた乳量を得やすくなるからです。

「乳量」には、実数字の明確な目標を共有しやすく、また毎日のバルク乳量からその進捗状況がわかりやすい点があります。繁殖成績アップの取り組みも、わかりやすい目標があると、やる気も継続しやすくなります。様々なアプローチがありますが、「妊娠牛の頭数」を最初のキーワードにしてはいかがでしょうか。

弱点を見つけ、改善に向けた目標を定めること、それに向かって農場全体でひとつずつ克服していくことで農場の生産性は確実にアップしていきます。そして、農場に関わる機会を与えていただいているわたしたちも一緒に試行錯誤しながら、生産効率を高めていけたらと思います。

「あなたの農場に、妊娠牛は何頭いますか？」

技術部 技術課 久富 聡子

<オマケ> 農場で耳にした、発情発見をするときに気にしていること

- * 作業しながらの観察とは別に「発情発見」のために、1日に複数回、牛を観察する時間がある
- * 毎日、同じ時間帯に観察する
- * 朝一番で、牛舎をまず一周する
- * 牛が、牛舎とパーラーやパドックなどを移動するときに観察する
- * 牛が静かにしている時間帯に観察する
- * 搾乳をしているときに、注意して牛を見る
- * マウンティング、スタンディングをしている
- * 陰部の腫脹・粘液を見る
- * 分娩後日数（発情が来るタイミングなのかどうか）を確認する
- * 繁殖管理データで、周期が近い牛をチェックしておく
- * 従業員が発情発見した牛が受胎したら、ボーナス（1頭1,000円など）をつける
- * 挙動不審なときは、発情が来ているのではないかと疑う

- ・ 落ち着きがない
- ・ ウロウロと徘徊している
- ・ においを嗅ぎたがる
- ・ 作業者に寄ってくる・舐める
- ・ 鳴く・吠える
- ・ こちらをじっと見る
- ・ 目が血走っているように見える
- ・ ほかの牛を突くなど、ちょっかいを出している
- ・ エサをいつもよりも残す
- ・ 搾乳時に乳房の張り方が違う・乳量が減る
- ・ イライラしているように見える
- ・ 尻尾が軽く持ち上がる

・・・など。

発情について、「いつもの牛と、何かが違う！と感じるとき」という声は多かったです。そのほか、気にしているポイントがあれば是非、教えていただけたらと思います。